

GBS スクリーニング検査における増菌培地の有用性と直接ラテックス凝集反応の検討

◎富井 康明¹⁾、山田 智¹⁾、吉川 尚実¹⁾、小川 勝¹⁾
社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 総合母子保健センター 愛育病院¹⁾

【はじめに】*Streptococcus agalactiae* (Group B Streptococci ; 以下 GBS) は膣内常在菌であるが、母子垂直感染により新生児に髄膜炎や敗血症などの GBS 感染症を起こすことが知られている。アメリカ疾病予防管理センター (CDC) では妊婦 GBS スクリーニング検査において GBS 増菌培養による検査を推奨しているが、我が国の産婦人科診療ガイドラインでは妊婦 GBS スクリーニング検査は推奨しているが増菌培地を用いた培養法には触れていない。今回我々は、検体を直接、非選択培地に塗抹する直接法と GBS 増菌培地に接種する増菌法との比較検討を行ったので報告する。また、増菌培養液を用いたラテックス凝集法についても検討を行ったので報告する。

【対象・方法】対象：2020年3月から8月までに当院産婦人科から提出された GBS スクリーニング検体 1315 件。
方法：GBS スクリーニング検体をバイメディア羊血液寒天培地 M58 (栄研化学) に塗抹後 (直接法)、GBS 増菌培地 (極東製薬工業) に接種した (増菌法)。直接法は 35℃、5%炭酸ガス培養を行い、24hr で中間判定、48hr で最終判

定を行った。増菌法は 35℃、24hr、好気培養を行い、色調の判定を行った。増菌培地は色調に関わらず、PASTOREX ストレップ (BIORAD) を用いて、培養液から直接ラテックス凝集反応及び抽出操作を行ったラテックス凝集反応を確認した。さらに培養液 1 白金耳をバイタイムディア CA 加羊血液寒天培地 (極東製薬工業) に 24hr サブカルチャーを行った。なお、直接法及びサブカルチャーでの GBS の同定には PASTOREX ストレップを用いた。

【結果】GBS の検出率は直接法が 18.8% (247/1315)、増菌法が 21.6% (284/1315) であった。培養液から直接ラテックス凝集反応が確認されたのは 22.0% (289/1315)、抽出操作を行い凝集が確認されたのは 21.7% (285/1315) であった。非溶血 GBS は 3.5% (10/1315) であった。

【考察】増菌培地を用いることで GBS の検出率が増加し、増菌法と直接ラテックス凝集反応との相関も良好であることから、抽出操作が不要となり簡便で高感度に GBS を検出できる事が示唆された。

連絡先：03-6453-7314